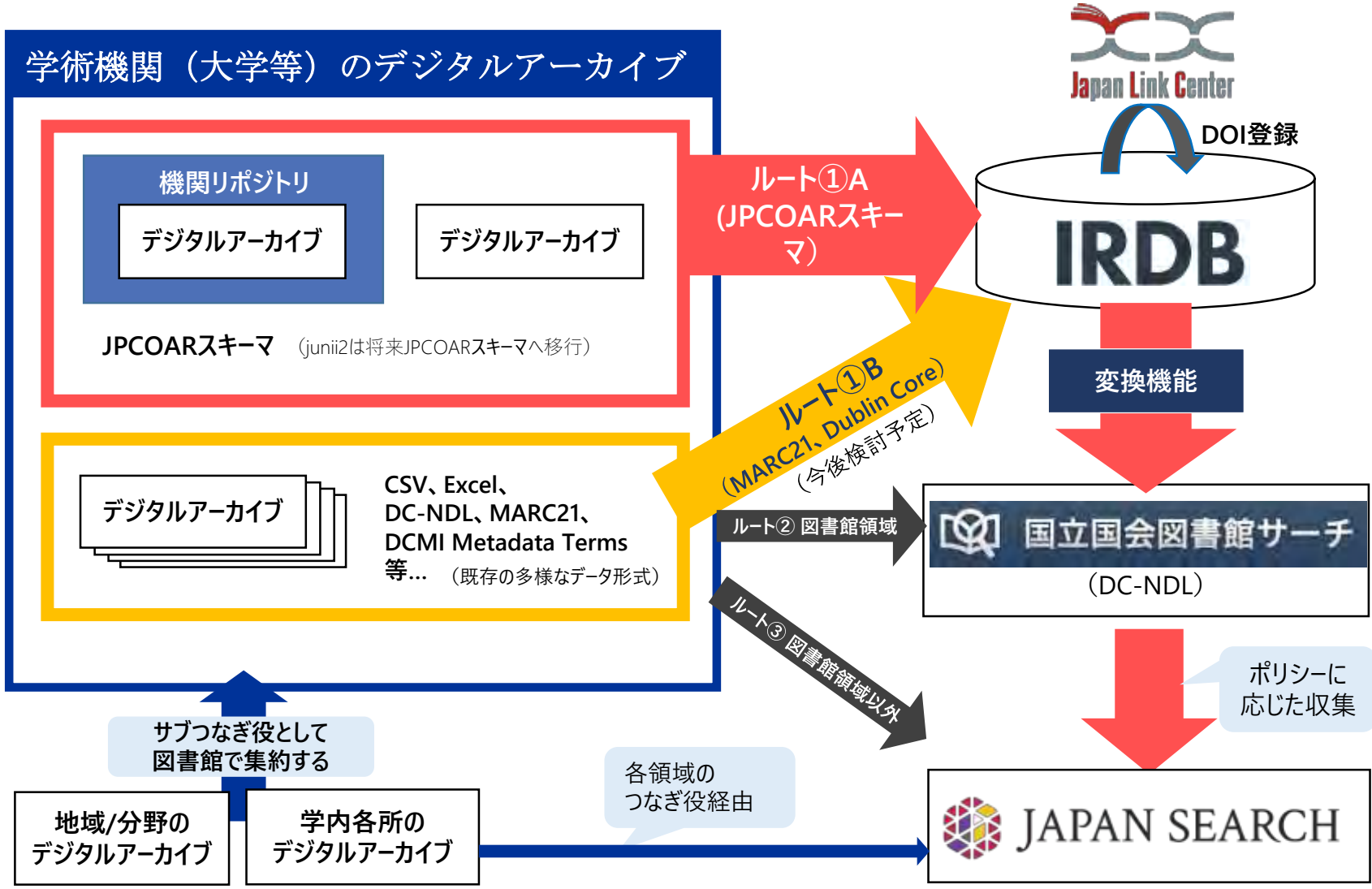


これからの学術情報システム 構築検討委員会とメタデータ

これからの学術情報システム構築検討委員会
システムワークフロー検討作業部会主査
飯野勝則（佛教大学）

デジタルアーカイブの効率的なメタデータ流通経路 (図)



「これからの学術情報システムのメタデータ収集・作成方針について（案）」【ドラフト版】

これからの学術情報システムのメタデータ
収集・作成方針について（2021）【案】

これからの学術情報システム構築検討委員会
システムワークフロー検討作業部会

これからの学術情報システム構築検討委員会

日本語 English

ホーム > これからの学術情報システム構築検討委員会 > システムワークフロー検討作業部会
/ システムワークフロー検討作業部会ドキュメント

- ▶ ホーム
- ▶ ニュース
- ▶ 委員会・作業部会
- ▶ 委員会概要
- ▶ システムモデル
検討作業部会概要
- ▶ システムワーク
フロー検討作業部
会概要

システムワークフロー検討作業部会ドキュメント

本作業部会の活動内容をご案内するため、関連資料を公開します。

検討段階の資料等

本作業部会で検討中の資料を、下記の通り公開いたします。

- 「これからの学術情報システムのメタデータ収集・作成方針について（案）【ドラフト版】」2022年2月18日時点
 - ご意見募集は、2022年4月30日をもって終了いたしました。たくさんのご意見をいただきありがとうございました。

https://contents.nii.ac.jp/korekara/about/sw_wg/documents, (accessed 2022-05-19)

「これからの学術情報システムの在り方について (2019)」

- 2015年（平成27年）に公開された「これからの学術情報システムの在り方について」を改訂する形で、2019年（平成29年）に公開された文書
- 「（2019年）現在の目録所在情報サービス機能を維持しつつ、電子情報資源への対応等、より豊かな機能を各機関が選択的に導入できるシステムの実現に向け、2022年を目処とした進むべき方向性、次に取り組むべき課題、及び検討体制を提示する」ことを目的に作成された

「在り方（2019）」が示す「進むべき方向性」（1）

3. 進むべき方向性

これまでの検討を踏まえ、これからの学術情報システムが実現すべき機能及び検討課題について、以下の5点にまとめた。

(1) 統合的発見環境を可能にする新たな図書館システム・ネットワークの構築

統合的発見環境の実現に向け、従来の NACISIS-CAT/ILL の枠組みを維持しながら、より豊かな機能を各機関が選択的に導入できる環境を整備する。そのために、国立情報学研究所等が集中的に提供する中央システムと、各機関が中央システムと連携して運用する図書館システムを有機的に連携させた新たな図書館システム・ネットワークがサポートする機能を定め、それぞれが担うべき役割を整理する。

(2) 持続可能な運用体制の構築

新たな図書館システム・ネットワークを運用するための持続可能な枠組み及びコスト負担等について検討を行う。

(3) システムの共同調達・運用への挑戦

これまで各機関や国立情報学研究所がそれぞれ単独で調達・運用してきたシステムの共同調達・運用を選択肢とした課題解決の実現可能性を見極めるため、コスト、各機関での分担、運用主体等について、踏み込んだ検討を行う。

「在り方（2019）」が示す「進むべき方向性」（2）

(4) メタデータの高度化

他機関（NDL、出版社等）と連携し、RDA（Resource Description and Access）及び日本目録規則 2018 年版への対応のほか、BIBFRAME 等の新たな国際標準への対応について検討を行う。

(5) 学術情報資源の確保

印刷体とともに、幅広く電子情報資源（大学等のデジタルアーカイブや過去資料の電子化を含む）を確保するとともに、統合的発見環境を通じたアクセス及び資源共有を推進する方策を検討する。

- これらを具現化させるためには、図書館をめぐるさまざまなシステムやサービスを設計する必要があることに加え、その中で提供されるメタデータがシステムやサービス、利用者にとって適切かつ望ましいものであることが求められる
- とくに（4）（5）では、メタデータが主役ともいうべき位置づけ

ご清聴ありがとうございました